

乳幼児期の育ちと保育を考える

2007
7

幼児の 教育



幼児の教育



第106卷 第7号

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第106巻 第7号

もくじ

●巻頭言

「協同的に学ぶ」ということ

岩田純一

●特集

生活を保育へ Vol.2

―着替えるということ―

着替え―暮らしの中のひとこま―

長田瑞恵

おむつを選ぶ

近江由伊

脱ぐ・着る・着替える

村石理恵子

子ども服再考へのいざない

岡田宣子



エリックソンの

「Dr.ボルクのライフサイクルについての省察」から

津守 眞

ある日

●子どもと保育の情景 (7)

戸田雅美

「話を聞く態度」をめぐる覚書

観察者と保育者の対話 (4)

横井紘子 / 前田宏子

●若手研究者からの報告 (2)

Tちゃんの変化の中に

金 允貞

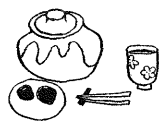
観察者(部外者)としての私がいた意味

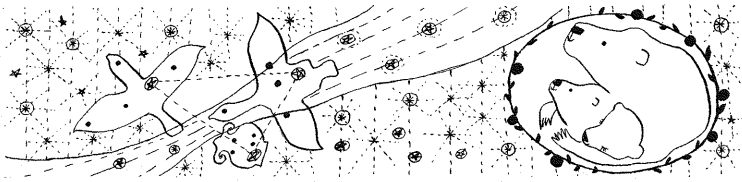
●お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (7)

バオバブ保育園訪問記

塩崎美穂

―いずみナーサリーの保育実践へつなぐ―



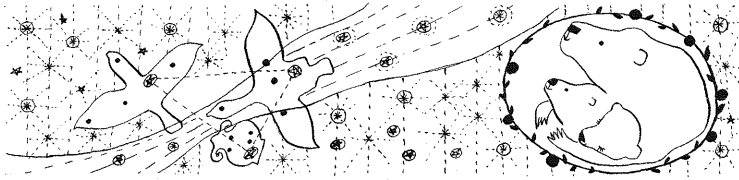


巻頭言

「協同的に学ぶ」と「つながり」

岩田純一

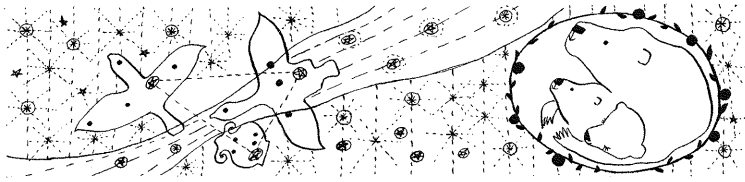
近年、幼小の発達や学びの連続性から「協同的な学び」の必要性が唱えられています。もちろん、この学びは小学校での学習とは異なるものです。幼児の生活は遊びが中心であり、遊びを通してさまざまなことを結果として学ぶのであって、学ぶために遊ぶわけではありません。子どもたちが遊びや生活の中で共通の目的を生み出し、その実現や解決に力を合わせて工夫しながら協同的に活動を進めていくといった共同性の育ちは、就学が間近な年長児にとって大切になります。それは小学校での生活や学習活動を支えていく基盤となるからです。しかし、この協同的な学びは、決して幼児期の後半になってから一挙に出現してくるわけではなく、それまでの教育課程（過程）の積み重ねの延長上に可能となってくるのです。



*

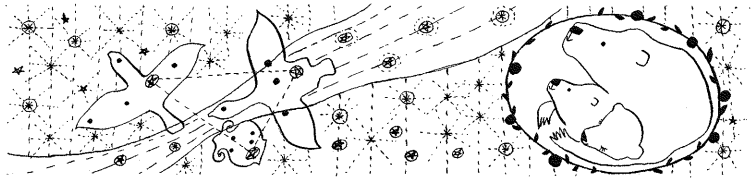
初めて幼稚園に入園する年少児にとっては、まず園の中で一人ひとりが安定した生活をつくっていくことから始まります。最初は保育者と子どもの一対一の関係づくりが中心であり、仲間に関心はあっても子ども同士と一緒に遊ぶことはなかなか難しいようです。だからこそ「○○ちゃんこんなの作ったよ」「みんな○○をして遊ぼう」などと子どもたちをつなぐ保育者の働きかけが必要になります。しかし年少児も後半になると、まだ保育者の仲介が必要だとしても、仲間とも一緒に遊べるようになり、お弁当を「一緒に食べような」と仲間を誘う・仲間と約束するといったことも見られます。

しかし、本格的に仲間との生活や関係づくりに腐心するのは年中児を迎えてからです。この期には、仲間の遊びに入れるか否かが子どもにとっては関心事になってきます。従って、遊びの仲間に入れるかどうかや、仲間の取り合いが原因となったいざこざなどがこの期の特徴になります。「○○くんはおれの仲間や」「友達やから」といった関係表現も盛んに聞かれます。仲間との関係が活発になるだけ、そこに葛藤や摩擦が生じてくることも多くなります。しかしながら、まだ自分たちではその関係をうまく調整していくことが難しく、「先生に言ってやる」と保育者に言いつけにくるといったパターンが典型的に見られます。そこで保育者は、双方の言



い分を聞き、それを双方に伝えながら仲裁に入ることになります。この保育者の仲立ちによって、子どもは相手の言い分や気持ちを知り、何がなぜ悪かったのかなどを知るといった、他者への理解や共感性、道徳的な心をはぐくんでいく格好の機会にもなるのです。そして、自分の言い分を一方的に話すだけではなく、相手の要求や言い分にも耳を傾ける必要性があることを学ぶことになります。

年長児にもなると、相手の気持ちを察し合いながら、仲間が共同してかわるこゝとが格段にうまくなってきました。それに伴い、子どもは「わたくし」を「わかれわれ」の一員としてとらえるようになってきます。この「わかれわれ」という意識は、へ皆のために頑張る・応援する「へ皆の遊び」といった仲間への意識をもった共同的な行動として現れてきます。もはやほとんど保育者の介入を必要とせず、子どもは皆でイメージを共有しながら遊びをつくり・展開し、いざこざも当事者同士が話し合うとか、仲間の仲裁によって解決していけるようになってきます。年長児には仲間で競い合う遊びが多く、そこではしばしば遊びの公平さをめぐるいざこざも見られますが、子どもたちで工夫しながら公平なルールをつくって遊べるようにもなります。従って、この時期、保育者の手な介入が子どももの自律性が育つ機会を奪ってしまう危険性があり、保育者には、ときに待つ・黙って見守るといったスタンスが求められるようになります。



*

「協同的な学び」とは、保育者が一方的に課題を与えてグループで一緒に活動をさせて事が足りるといったものではありません。共同性の育ちこそが、子ども同士が協力・協同（アイデアを出し合う、教え合う）しながら目的の実現のためにつながっていくことを可能にします。それには、まず一人ひとりの生活の充実があり、次に仲間との共感する関係性をつくっていくといった積み重ねが必要なのです。中でも年中児に仲間との生活や関係づくりがしつかりなされていないと、年長児になってもバラバラで仲間と共同で行動することが難しい、何となくクラス全体に落ち着きがない、いつまでも保育者が声を荒げて指示しなければならないといったことにもなってしまう。

仲間との協同性の育ちは、他方で「わたし」という個の世界の深まりとつながったものです。それは、「まねせんといて」とか「人は人、じぶんはじぶん」といった表現となっても見られます。仲間との生活の中で、一方では仲間との共同的な関係性を希求し、他方では個としての自分らしさへの希求も強くなってくるのです。保育者の大切な仕事は、一人ひとりの個の生活を仲間との共同性へとつなげ、仲間との共同・協同的な活動や関係がさらに主体的な個の充実へと還っていくような実践をつくり出していくことではないでしょうか。

（京都教育大学）

特集

生活を保育へ Vol.2 — 着替えるということ —

着替え

— 暮らしの中のひんがし —

長田 瑞恵

私が初めて娘の服をこの手で着替えさせたのは、娘が生後五日目のことでした。産院は母子別室だったため、それまでは授乳以外の世話はスタッフがしてくださったからです。この日は退院に備えて沐浴実習があり、文字通り「生まれて初めて」母親自身の手で娘を着替えさせたのでした。

先生役の看護師さんの指示どおり、着せやすいようにあらかじめ肌着と上着の袖を重ねて通しておき、座布団ほどの大きさのクッションの上に置きましました。第一関門の沐浴を何とか終わらせ、用意して

おいた着替えの上に娘をタオルにくるんで寝かせました。そして、袖口から自分の手を差し込んで娘の小さな小さな手をそとつまみ、指を反対に折り曲げてしまわぬよう注意しながら、袖の中をゆつくりと引っ張りました。

「細い指や爪を袖に引っかけて怪我させてしまわないだろうか」「こんなに華奢な腕で折れてしまわないだろうか」「肩の関節が抜けてしまわないだろうか」「こんなに手間取っていたら体が冷えてしまわないだろうか」…。

やっとの思いで着替えが終わった時、冷や汗が出るくらいにどつと疲労感に襲われたものです。娘のほうも、きつと、「あし、くたびれた。看護師さんに着替えさせてもらおうほうがずっと楽……」というところだったでしょう。

このように、着替え一つをとっても、第一子の娘との生活は初めてのことばかりで、戸惑うこともたくさんありました。「発達心理学が専門で、幼児教育学科に勤めています」と言うのと、「子育ては心配いらないわね」というようなことを言われることがあります。しかし、認知発達理論の説明はできても、子育てで必要な事柄は全く別の次元の問題でした。頭の中の知識と、目の前の小さな赤ちゃんとの間のギャップは想像以上に大きいものだったのです。

娘が加わった新しい生活にも徐々に慣れてくる

と、毎日繰り返し返される着替えは、娘の成長を実感する時間の一つになりました。成長に合わせて服の形や素材も変わりましたし、着替えの時の娘の様子も大きく変わってきました。

新生児のころから首がすわってくるまでは、寝かせたままでも着替えやすい前開きの肌着ばかり着せていました。このころの娘はまだ活発に動くわけでもなく、仰向けに寝たまま、されるがままになっていました。ただ、裸にすると気持ちがいのか、そろえておいた肌着の上で尿や便をされ、慌ててまた着替えをそろえ直したことがたびたびありました。

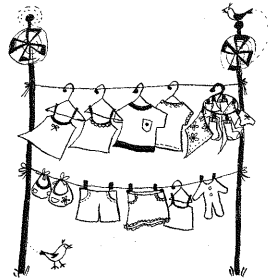
首がすわったあとは、頭からかぶる服や上下分かれた服を着せることも増えました。お座りができないころは親が娘をひざに抱いて支えながら着替えさせていましたが、娘が自力で床に座っていられるよ

うになると、遊んでいる娘をあやしなから、さつと着替えさせることができるようになりました。娘のほうもだんだんと手先が器用になり、好奇心も旺盛になって、服のひもを握ったり袖を口に入れたり、娘なりのお手伝いをするようになりました。また、お風呂が大好きな娘は、服を脱がされるとお風呂の時間になったことがわかるようで、はしゃぎ始めるのでした。

ところが、八か月を過ぎたころから、着替えの最中に泣きながら、のけぞって抵抗することが増えました。着替え全般が嫌というわけではなさそうで、どうも頭からかぶるタイプの服が苦手なようです。最初のうちは、「お手々、貸してねー」などとなだめながら、少し強引に手早く着替えをすませてしましました。しかし、目を追うごとに娘の抵抗は激しさを増していきます。「これも自己主張の一つ、成

長の証」とほほ笑ましく思いながらも、朝の忙しい時などは、毎度毎度、大の字になって私のひざの上から滑り降りていかれるのも少々困りものです。

そこで、娘の好きな「いないいないばあ」遊びのように、「ほーら、いないいない、ばあ！」とかけ声に合わせて首を通すと、機嫌よく着替えられることがわかりました。ただし、この方法が通用するのは娘が眠くない時だけで、最近では夢中で遊んでいる最中に機嫌を損ねずに着替えさせるのにも工夫が必要になってきました。この分ですと、無理せず着替えるための別の「奥の手」を考えなければならなくなる日も近そうです。



娘はまだ言葉では気持ちを表現してくれません。満面の笑みを浮かべけらけらと声を立てるときも、真っ赤な顔をして泣きじゃくるときも、その様子から娘の気持ちを推し量り、前後の文脈から理由を探り当てるしかありません。この一種の謎解きを毎日繰り返しながら、私と娘はお互いを探り合い、少しずつ理解を積み重ねてきました。それは、まだ娘自身にもよくわからない娘の気持ちを代弁しながら、娘の中にある、もやもやとした心の原形のようなものに光を当て、次第に形あるはつきりした心へと育てていく過程であるように思います。そして、その繰り返しを通して、私にとっての娘はもちろん、娘にとっての私も、ほかの誰とも替えられない存在であるような関係へと育ってきたように思います。

さて、娘の着替えを選ぶのは私の楽しみでもあり

ますが、その日の天候や娘の発達に合わせた服を適切に選ぶのはなかなか難しいものです。

初めて頭からかぶるタイプの服を着せたのは、生後八週目のことでした。当時、娘はまだ首がすわっていませんでした。実は、誕生祝いに頂いた中からかぶる服があり、一度も着せずに着られなくなるのも申し訳なく思い、少し無理をしてお出かけの日に初挑戦したのでした。

ところが、このことが思わぬ悲劇（喜劇？）を招いてしまったのです。

娘はチャイルドシートに座るとなぜか便意を催すことが多いのですが、この日も案の定、お出かけの車の中で一生懸命いきんでいました。車を止め、おむつを替えようと娘をチャイルドシートから抱き上げて、私は慌てました。肌着だけならともかく、上着もチャイルドシートも、大変な状態になっていた

のです。しかも、今日は初挑戦の頭からかぶる服。娘の首はまだ完全にはすわっていません。

「どうやったらこれ以上被害を拡大させずに、娘を着替えさせることができるのだろうか?」。

夫にも協力してもらい、狭い車の中でやつとの思いで娘を裸にし、予備の普段着に娘を着替えさせました。娘はすっきりしたのか、すました顔で清潔な肌着におさまっています。私は、初披露で見ても無残な様子になってしまった可愛らしい洋服を複雑な思いで見つめながら、「これは大変な生活が始まってしまった」と改めて思ったのです。

娘との日々は、私の思いどおりには進まないことの連続です。しばしば、「やってしまった!」と思うようなことも起こります。しかし、どんなに慌てた経験も、あとになってみれば楽しい笑い話になります。そして、笑いながら少し反省します。という

のも、「やってしまった」経験は、たいていは、私の気持ちに娘の状態より少しだけ先走ってしまったときに起こるからです。私は娘との生活を通して、相手に寄り添うということ、自分の意図や思惑はいったん保留にして、相手のペースを守りながら気負わずに待つということが、少しずつ実感としてわかってきたような気がしています。

毎晩、娘を寝かしつけたあと、洗濯を終えた娘の服を畳み、保育園に持って行く着替えを用意します。私はこの時間が大好きです。少し大げさに言えば、娘との暮らしを改めて実感できるひとときだからです。

妊娠初期から切迫流産のために入退院を繰り返していた私は、毎日祈るような気持ちで、まだ見ぬ我が子が着るはずの服をせっせと作り続けました。退

院の日に着るドレス、体を包むアフガン、体温調節のためのベスト、初めての冬用のカーディガン、まだ歩かぬ足に履く靴下…。完成した服は、どれも、これでちゃんと着られるのかと心配になるくらい小さく感じられました。新生児の平均身長は約50cm。

知識としては当然知っていましたし、職場にある実習用の赤ちゃん人形はもちろん、本物の(?)新生児を抱いた経験もあります。それなのに、我が子の大きさとして考えると、50cmとはなんと小さいことか…。

少しずつ大きくなるおなかをなでながら、できあがった何着もの服を取り出しては眺め、またきれいに畳んではしまい、おなかの中の娘に話しかけ続けました。「待ってるから、どうか無事に生まれてきてね」。

娘と一緒にいよいよ産院を退院する日、私が編ん

だニットのドレスに身を包んだ娘を見た時、涙が止まりませんでした。リスクの高い妊娠生活を送っていた私にとって、小さな服は生まれてくる子どもの生命を象徴するものだったのです。あまりの小ささに感嘆したドレスですが、その袖がなお余ってしまふほど小さな娘は、真つ赤な顔をして眠りながら、確かにそこに生活するものとして存在し始めたのでした。

妊娠中には娘の生命の象徴だった服は、今は娘の毎日の生活の一部として私の手の中にあります。新生児のころよりは二回りほど大きくなった服を一枚一枚丁寧に畳みながら、娘が私の元へ生まれてきてくれたことに感謝しつつ、明日はどうやったら娘の抵抗に遭わずに楽しく娘を着替えさせることができるか、思案を巡らす毎日です。

(十文字学園女子大学)

おむつを選ぶ

近江由伊

私の勤務している保育園の乳児クラス（〇〜二歳児）では、育児担当制の方法をとっています。担当保育者が、育児（食事、排泄、着脱など）において、クラスの中でも、同じ子どもに継続してかわるようになっています。今回、「着替える」というテーマをいただき、真っ先に思いついたのが、私が四月から担当している二歳児のAという男の子です。Aはおむつを選ぶということを始めたのです。

Aとの出会い

Aと初めて出会った時の印象は人懐こく、穏やか

なことでした。その一方で自分から甘える姿が見られずギャップを感じましたが、そもそも私がAに感じた人懐こさは、相手を拒否しないこと、何にでもよく笑ったり、逆に表情をつくって大人を笑わせたりすることから感じていたものでした。また、日中、園で過ごしている時は、私が声をかければ必ずと言っていいほど笑顔を見せてくれるのに、母親が迎えに来るとすぐに抱っこで甘え、その時に私に出会っても顔すら見せてくれないことがしばしばでした。園では自分らしさを出せてないのではないかと感じました。

まだAと私は出会ったばかり。Aとの関係を丁寧に築き、AがAらしく園でも過ごせるようにと、Aが「こうしたい」と言ってくれた時には、Aが私に伝えてきてくれたことを大切にするように努めました。また、Aからスキンシップを求めることはほとんどなかったため、スキンシップを意識的にとるようになり心がけていました。

しばらくして、Aは育児の場面で甘えることが目立つようになりました。Aが今までできていたことを拒否し、「できない」と言うようになったのです。私は、Aの気持ちをそのまま受け止めていいものかどうか葛藤がありました。まずはAの思いを受け止めようと心に決め、Aが「できない」と言った時には、「そうなの、じゃ、先生手伝ってもいい？」と尋ね、着脱なり、手洗いなり、その手をふくこととなり、私が全面的に介助をしていました。

次第に、Aが自分から「抱っこ」と私に要求したり、ふと私のひざに乗ったり、思い通りにできないことがあると泣き、私に抱っこを求める姿が見られるようになります。Aが少しずつ私に心を許してくれているように感じ、うれしくなりました。しかし、育児の場面での甘えがエスカレートしているように感じ、つい「やってみよう」とAに求めてしまうこともありました。私の在り方に一貫性がないことは認めますが、それでもAの思いを受け止めようと思いついたのは、Aが私に少しずつ心を許してくれているように感じたAの姿があったからこそです。

お盆休み明けに、Aに変化が見えてきました。育児の場面での甘えが強く感じられなくなってきました。食事の進みがよくなったり、少しずつですが、着脱にも意欲が見られたりするようになりました。家庭で父親と一緒に歌っている歌を、園でも熱唱する姿が見られ、Aの中で家庭と園のつながりができ

てきたように感じました。また、自分より小さい子に対して靴を履くのを手伝い、それを誇らしそうにする姿なども見られてきました。

おむつを選び始めるーさまざまなおむつ方

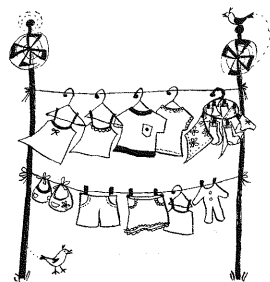
このように、Aが自分らしく園でも過ごせ、自信がついてきたと少しずつ感じられるようになってきました。しばらくすると、それまでおむつを取り替えるときには私が取り出していたのですが、Aが「おむつを選ぶ」ということを始めたのです。

はじめは、Aが「○○(買ってきた場所)のおむつがいい」と言ったことです(私の勤務している園では、おむつは個人で用意しています)。私は、それまで用意されていなかった新しいシリーズの柄のおむつだろうと思いい、そのおむつを取り出しました。やりとりが続く中で、Aはそのシリーズの中で

も、ある一つの柄(リングがついてるやつ)がよいのだということがわかりました。しかし、一日のうちにその

柄のおむつがなくなってしまうことがあり、私はそのことを伝えたくて、Aに用意されているおむつをすべて出して見せました。「ね、リングがついているのなんでしょう。この中だったらどれがいい?」と言って、Aにおむつを選んでもらったのです。

選び方は次第にいろいろな方法が出てきます。自分のおむつの入っている引き出しをあけて、その中から「1、2、3…」と数を数えて、「2階!」などと言って選ぶこともありました。Aはマンションに住んでいるためか、数字にとっても興味があります。



「住んでいる階について）Aくん6、Rくん（同じマンションに住んでいる他クラスの子）2」と言ったり、6階に住んでいることから「6」の文字を見つけると「Aくんの6」と言ったりします。積み木を積んでエレベーターやマンションを作ることでも好きで、作っては「ここが○階」と言うこともあります。

数だけで選ぶこともありました。「1、2、3、…11！」と言いながらおむつをなぞり、最後に引き抜くのです。そんな話をAの父親にすると、「お風呂で数えているからですかねえ…」と話します。選ぶ方もきつとAの楽しかった体験や興味のあることとつながっているのだと感じます。

新しくイヌの絵柄シリーズのおむつが用意されると、Aは「わんわんのおむつがいい」と言いました。「わんわんのおむつ」を選び始めて数日、私に

「わんわんのおむつ」を二つ差し出して「どれにしようかってして」とAは言いました。私の記憶ではAとそのようなことをした覚えがありませんでしたが、「どれにしようかな てんのかみさまのゆうとおり なのなのな」と指を交互にさして「こっち」と私が決めました。すると、Aはうれしそうな表情で「こっち」と私が選んだものと反対のものを選び取りました。

私にとつて、このことはとても衝撃的で、かつうれしい出来事でした。Aが偶然的なやり方にしろ私に選ばせておいて、それでいて私とは違うものを選び取ることは、いったい何を意味しているのでしょうか。このような場面の中で、Aは私（大人）の意見とは違う選択肢もあり、それを選び取ること、主張することを体験的に積み上げているのでしょうか。

私の決定がすべてではないことをAがこのような

形でも表現してくれていることで、Aが頼もしく思え、私はうれしくなったのです。

Aが「先生選んで」「どれにしようかな、して」「ねえ、うたって」と私に選ばせるのはどんなときだろうと考えてみます。はじめは自分の好きな柄のおむつがないときのように感じられました。もちろんそういうときもありますが、常にそうとは思えませんでした。Aの中では、すでに決まっているのに、私に選ばせるときもあるし、単に私との一対一のやりとりを楽しんでいるのではないかとも思います。最近では私が「どれにしようかな」を歌い終わって決めたものとは、違うものを取って「こっちはたねえ」と言ったりします。「どうして？」と一回だけ尋ねてみたこともあります。Aの様子からはその理由がよくわかりませんでした。また、一回だけですが、私と同じものを選ぶこともありましたがこのやりとりを続けている理由ははっきりとはわ

かりませんが、Aが選ぶのなら、Aとのやりとりにつき合い、その成り行きを見守り、Aにとつての意味を考え続けていきたいと思っています。

話はトイレでの排尿の話に移ります。Aは家庭でトイレに行くこともあると聞いていましたので、少しずつ園のトイレに慣れてほしいと思い、誘うことはありましたが、ほとんど拒否されました。しかし、私が休んでいる間にAがトイレに行くようになりました。私は休み明けの出勤でその話を聞いてうれしく思い、Aをトイレに誘いますが、私とは、トイレではなく、おむつ交換台のある所に行き、おむつを選ぶことを期待しているようでした。それでも、私とも徐々にトイレに行くようになり、今度はズボンや上着などの洋服を選ぶこともするようになったのです。現在、Aはトイレに行きたがらない日もありますが、そんなときは無理せずにおむつ交換台でおむつを替えるようにしています。

おむつを替える場面から思いを馳せる

おむつを替える場面と重なるAの姿は、ほかの場面でも見られます。たとえば、私がおやつや食事に誘おうとすると、Aは必ず陰に隠れて、「ばあー」と私を驚かせます。また、園庭で過ごしている時に、Aは私に積極的に「先生一緒に遊ぼう」と言うのです。Aが私とのやりとり、特におむつ交換やおやつや食事に誘う場面では、決まりきったやりとりを期待しているようなのです。その一方で、Aに「一緒に遊ぼう」「一緒に行く」と誘われても私が応えられない時に、なかなかA一人では自分の行きたい場所に向かえないことがあります。私はこのような場面に行くわすと、願いとしてはAが行きたいと思う場所へ一人でも行くことができました、と思うのです。Aに自分のやりたいことを人と楽しむことももちろん、一人でもそれに向かっていけるような自信

をもつけていってほしいと願っています。

Aが私とおむつを選ぶということを始めてから、この原稿を書いている二月まで、Aが必ず選んでいるということはありません。しかし、それを続けていることには、確かに意味があります。同じやりとりでの安心感、自分がしていることを認めてもらうことを通して、次のステップへ向かう心の栄養の充足期間なのかもしれません。日常的で些細なことだからこそ、その人にとって何か大切なことが含まれているような気がしてなりません。

しかし、私が興味をそそられたAのおむつを選ぶ場面。Aは大人の期待を敏感に感じ取ってしまうところがありますので、Aがこのやりとりを私のためにするのではないように、私の心もちに気をつけたいと気を引き締める今日このごろです。そして今後の展開が楽しみです。

脱ぐ・着る・着替える

村石理恵子

「着替える」ことには、「脱ぐ」ということと、「着る」ということの両方の意味があるでしょう。幼稚園での「着替える」は、「脱ぎたくない…」から始まるようです。

脱ぎたくない その一

ある年、紙おむつのままで入園してきた三歳児のAちゃん。早くに保護者からは離れられ、自分から遊んでいても、トイレには行きませんでした。遊びの切れ目や、ほかの友達がトイレに行く時に、一緒に誘っても、行きません。降園前、ふとじつとして

いるAちゃんのおしりの辺りが何やらふくらんでいました。紙おむつが吸水している様子です。パンツ（おむつ）を取り替えようと誘うと「でてない」と言うAちゃん。そのかたくなな表情、態度。遊んではいても、まだまだ幼稚園に慣れていないのです。

降園時に保護者に伝えると、家でも、できたことを知らせないとのことなので、保護者と密に連絡を取り合うことにしました。

そして、家で母親となら一緒にトイレに行くようになったと知らせがあったのは、ちょうど気温が上がり水遊びの楽しい季節でしたので、保護者と相談

して、いよいよ園でもパンツにすることにしました。Aちゃんが服のまま遊んでいて水がかかった日、服もパンツも取り替えることにしました。その際、ついでにトイレに行ってみることにしたので。この日から、Aちゃんがおむつをはずし、パンツをはいてトイレに行くという流れができました。

排尿できるようになるとAちゃんは、「家に帰りたいくない、もつと幼稚園で遊ぶ」と降園を渋るようになったのでした。

三歳児のBちゃんは、「でた〜」と、にこにこしながら漏らしたことを伝えてきます。服を脱ぐ手伝いをしながら、保育者がおしりをふいていると、そのままストンと保育者に身を預けてきます。そして、ひざに乗りながら、パンツを自分で引き上げようとするのです。少し手を添えると、パンツがはけます。はいたパンツに満足そう。Bちゃんは、漏ら

すたびに、にこにこ着替えるのでした。一か月ほどたつて「でる」と事前に伝えるようになったBちゃんは、お漏らしでは着替える必要が無くなりました。すると今度は、遊んでいて汚れた服を着替えることになってきたのです。その着替えも、にこにこ笑顔で取り組んだBちゃんでした。

排泄の自立、という大きな節目を幼稚園入園後に体験する子どもが増えていきます。もちろん、緊張して、入園前には家庭でできていたのに、幼稚園ではなかなかできずにいる子どももいます。漏らす、ということは、「脱ぎたくない」気持ちをはつきりと表したり、保育者と一緒に着替えることでさっぱりとした切り替えになったりして、大切なきっかけとなります。子どもが自分で着替えるという場面を、保育者の手を借りながらつくりだしていくことは、家庭で保護者と過ごす生活ではなく、幼稚園の生活

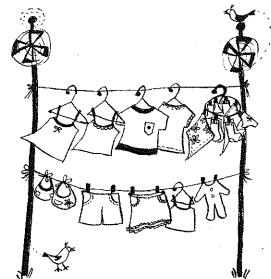
はまさに自分の生活なのだと思覚することだと思
います。

脱ぎたくない その二

身長・体重の計測の日。服を脱いで行うことに不安や恐れを抱く子どもがいるのは、当然のことでしょう。保護者同伴の計測であっても、服を脱がない、体重計に乗らない、という新入園児もいます。その場合に、保護者や保育者と一緒に体重計に乗って、あとから大人の分を差し引く、などということもありました。初めての体験に涙ぐんでいた子どもも、終わると、「なあんだ」といったほっとした顔になるのですが…。

さて、四歳児のCちゃんとDちゃんは、進級して初めての発育測定の日、「脱ぎたくない」と言いました。二人とも三歳児の三月の計測では、服を脱い

でいたのに、進級して
新しい学級での初回、
そんな気持ちになった
のです。靴下を脱い
で、裸足になることだ
けはしたものの、その



日は着衣のままの計測になりました。私は養護教諭と「脱がないんだね」と顔を見合わせて笑い、その状態を受け入れることにしました。特にDちゃんは、三歳児の一年間、自分のカバンを肌身離さず遊んだり、集会で遊戯室に出かけるときにはぬいぐるみやバッグ、クレヨンなどをしっかりと持ち歩き、むしろ「さらに身につける」ことが多かったのです、私も重さを増すような物を持っていないならいいと思つたのです。

ところが、一か月経た次の回、Dちゃんは、何も

なかつたように、ほかの友達と一緒に服を脱ぎました。この回、Cちゃんは脱ぎません。Cちゃんにつられてか、発言を聞いたEちゃんも「脱がないことにする」と決めたようです。CちゃんとEちゃんは、上着は脱いで、上半身は下着のシャツの状態でした。「やっぱり、これ(この格好)がいい」と上半身裸までいかない自分のスタイルを主張しました。

そして、そのまた次の回、今度はCちゃんも何も言わず、EちゃんもDちゃんも、さつさと服を脱ぎ、脱いだ洋服を畳むことに熱心になるほどになりました。この姿に、私と養護教諭は、「脱いだね」と顔を見合わせました。

進級して、服を「脱がない」心境から、それを強調しなくても平気になったCちゃんたち。彼らの着ている洋服は、まるで身を守る鎧だったのでしょ。強引な北風からはがされないようにする旅人の

マントかもしれません。それを解いてもいい、「脱ごう」と思ったのは、脱いでもまた着て、もとの自分に戻る見通しと安心感を自分でもてること、そして園の生活に自分らしく居られる場所や時間をもつことができるようになっていたからだったのではないのでしょうか。

着替える

三歳児のFちゃん、Gちゃん。ほかの子どもたちが砂を使って、小さな山を作り始めたり、カップにすくってごちそうを作ったりしている一学期のころ。やんちゃな二人の砂場遊びは、日に日に盛り上がっていました。少し前から、ついにスコップで穴を掘りだしました。この時のスタイルとしては、既に裸足になっていました。

その日はさらに、そこに水を流し込む、という遊

びを発見し、繰り返し二人は穴を掘り、そこに水を運びます。じょうろで水を汲んでくる行ったり来たりも、楽しくて、往復していると、少しずつ穴に水がたまってきました。たまった水の中にスコップを入れると、泥の水。さらに楽しくなって、水を混ぜたり、すくってみたりしていました。私は根気よくやっているなあ、と思って見ていました。そして、ちよつと目を離れたあと、「先生！ たいへん。FちゃんとGちゃんがけんかしてる」と知らせがきました。

急いで砂場に戻ると、泥の穴を真ん中に、Fちゃんは泣きそうな顔で立っています。Gちゃんは、口をとがらせて怒った顔です。「Gちゃんがかけた」「Fちゃんだつてかけた」と言う二人。どうやら、いよいよ動きが激しくなり、泥水の中にスコップを強くたたきつけたらしく、体や顔に泥がかかっ

たのです。

目や口の中には入っていない様子に一安心した私は、「二人とも、ゴマちゃんになってます。ほら、顔に、てんてんって、ゴマがついてる」と言いました。すると、ふつと表情が変わり、「ゴマだ」「ついでる」と顔を見合わせて笑うFちゃんとGちゃん。「ゴマちゃん、ゴマちゃん」と二人は節をつけて言いながら、スコップでまた水面をたたき始めました。私は「胡麻」の意味で言いましたが、「ゴマちゃん」というのは、幼いアザラシの呼び名として、どこかで聞いたことがあったのでしょう。二人はフレーズを楽しんでいました。そして、さらに裸足で穴の中に入り、バシャバシャと自分たちにかかるとを笑い合いました。けんかだと思って、ドキドキしていたほかの子どもたちも二人の楽しそうな様子にほつとして、またそれぞれの楽しみに戻ってい

きました。

一段落し、「それではゴマちゃんたち、着替えましょう」と誘うと、二人は足を洗ったり、顔を洗ったりし、いそいそと着替えに取り掛かりました。その日の降園時、保護者にもいきさつを説明すると「今日も、お土産ですね」と苦笑いしながら、着替えを持って帰りました。

「脱ぐ」「着る」が必要になってくるのは、まずは偶然のことが多いと思います。どろんこや水遊び、絵の具など、心が動き、自分でやってみたいと思つた遊びに取り組んだ結果として、汚れたり濡れたりして、服を脱ぐことになる、着替えることになる、という流れです。思い切り遊んだ後の着替えは、気持ちのよいものです。その着替えが楽しかった遊びの終わりの「(ピリオド)」となるのです。こうした着替えの体験が基になって、遊びにたつぷりと

浸っていくのです。そして、一枚の布を羽織つてヒーローになったり、忍者の帷子かたびらや妖精の羽といったものを作って、身にまとうことを楽しむようになります。いつてみれば遊びの中の「プラスαの着替え」というところでしょうか。

幼稚園では、まず、日ごろの服装スタイルで自然に振舞えることが、自分が自分らしくいられる生活の始まりでしょう。その後発生する「着替える」という行為は、時には、まるで卵の殻を割って出てくる雛のように、また蛹から羽化する蝶のように、「脱いで」次の姿を現すような、変化そのものであると感ずることもあります。「着替える」ことも自分らしくできることで、幼稚園の生活が子ども自身のものであるように、と思います。

(東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎)

子ども服再考へのいざない

岡田 宣子

母親の胎内から誕生し、元気な産声を上げる、これはヒトがこの地球上の外気を呼吸した瞬間です。

産湯を使い裸体に衣をまとい、独りの人間として人生がスタートします。衣は未熟な身体を包み、環境の変化に身体を保護し適応させていくのです。その後、子どもの身長は四歳では出生時の約二倍となり、まるで昆虫が脱皮するかのように衣服をめまぐるしく脱ぎ替えて成長していきます。神経系の発達

はさらに著しく、三〜四歳で脳の重さは出生時の約三倍に達します。

脳の発達

幼児の着衣行動は、この脳の体性感覚野・運動野でかなり広い部分を占める手の先を使って進められます。着るのを嫌がる一歳ごろから着衣の基本的習慣をしつけられる六歳ごろまでに、ボタンをつまむ、引つ張る、衣服をつかむ、伸ばす・着る空間をつくるなど、握力や手の巧緻性もかわりながら、

手の感覚器官から感覚神経を介して、刺激が脳の神経細胞に伝わり、次第に枝分かれして他の神経細胞とドッキングしていきます。体性感覚野と運動野が影響し合いながら活性化し、その運動パターンが組み込まれ、身近な衣服を自分で調節できるようになるのです。一つ達成できると自信につながります。そして次の課題へと意欲が生まれ、意志や個性がつけられ、自主的に行動し、意図的に学習して自分で自分の脳の賦活化を行い配線していくようになります。このように、手を巧みに使う着衣行動は脳の発達を促します。

ボタンの掛けはずし

衣服を受動的に着せる過程では着せ勝手・脱がせ勝手のよい衣服を、自分でコントロールしようとするころは、着勝手・脱ぎ勝手のよい衣服構造や、発達段階に応じた装着具への配慮が欠かせません。

ボタンの掛けはずし行動の発達を観察した結果、

次のことがわかりました。

①ボタンの掛けはずしは無理強いせずにボタンに興味を持ち始めた時をとらえて、まず扱いやすいしつけ服を与え、できる喜びを感じさせて意欲を高め、発達段階に応じていろいろなものに挑戦させるよう配慮する。

②視覚の助けを借りて掛けはずしをする視覚の助けを借りて掛けはずしをする年少幼児の場合、最上位ボタンは首つけねの前中心点より約7.5 cm 下げ、ボタンを可視範囲に置く。

③しつけ服の前あき上衣のボタンはつかみやすい平らな形状で直径約2 cmがよい。ボタンの色は服地と区別しやすい目立つ色にすると習得初期段階の幼児には扱いやすい。ボタンホールは縦穴で通常より2 mm程度大きめにし、ボタンの脚をやや長めにするると掛けはずしをしやすい。

④発達初期では掛ける方がはずすより時間が長くなる。ボタンの掛けはずし動作は、発達途中

の段階では個人差も大きい。体性感覚野が関与し空間認知できるようになると、見ないでも掛けはずしが可能になり、五歳以上の幼児ではほぼ完成する。

ボタンへの興味のめばえ

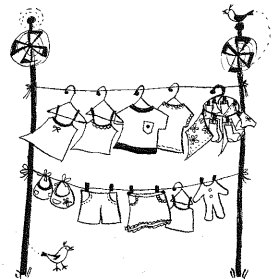
初期段階では母指以外の四本の指はまとまって握り込む動きが主で、ボタンやボタンホールを指先ではつまめません。指先が器用にしっかりと動かせるようになる、つまむ動作が可能になり、左右の手の協力によりボタンをボタンホールに合わせるという行動を起こしていました。目で確認しながら、感覚と運動を司る手を操作し、ボタンがはずせるようになる、ボタン掛けに挑戦していました。

出生時に大半は作られているといわれる神経細胞にいかにも確に刺激を与えるかにより、その後の枝分かれの仕方が変わっていきます。大脳の中で体性感覚野と運動野は中心溝を隔てて向かい合ってお

り、脳細胞内に発生する活動電位は相互に影響します。また、運動を起こそうとする寸前に準備電位が生じ、脳活動が賦活化されることも指摘されています。ボタンに興味をもった幼児は飽きることなく、驚くほどの集中力で行動します。興味をもち始めた時期をしっかりとらえて、脳細胞の神経線維が枝分かれする発達時期と考え、対応することが大切です。

手指の巧緻性

習得初期段階でヒトは、あらかじめ視覚などから得られる情報により、ボタンの形・材質・重さ・表面の滑りやすさなどを推定し、手の構えをつくりまします。手と指のアクティブタッチに体性感覚野の神経細胞が反応し、形や材質、その握り方などをとらえ、



握られた対象に接触する皮膚の情報がつぎに手の形を決める運動を誘発し、コントロールするのです。

ボタンの掛けはずしは左右の手の協応動作でもありません。実際の触情報が基になりボタンの掛けはずし動作は効率的に遂行されるよう、繰り返しして習得され、その結果、巧緻性を伴うことになるのです。

急速に神経系が発達する過程で、子どもは自らの内的欲求から遊びを通して繰り返し行動し、時間的、空間的パターンを神経回路に組み込んでいきます。個々のバラバラな生情報から、複雑な時間的・空間的パターンをつくっていく体性感覚の役割の一つは、この統合を行うことと考えられています。これは幼児の脳の発達に大きな役割を果たします。これらの子どもはボタンに対する積極的行動は、身体機能減衰の見られる高齢者とは正反対の反応です。

着衣行動

ボタンについて見てきましたが、幼児は着装する

ことを学ぶ段階で実際にどのような順序で着衣行動を起すのでしょうか、アンケート結果から見てもみましょう。

幼児が一人で行えるようになる一般的順序を次に示します。

- ①ソックスが脱げる。②靴が脱げる。③帽子が加えられる。④パンツや半ズボンが脱げる。⑤前ファスナーが開けられる。⑥長ズボンやスカートが脱げる。⑦前のファスナーが閉められる。⑧パンツや半ズボンがはける。⑨長ズボンやスカートがはける。靴がはける。⑩上着が脱げる。⑪かぶりシャツが脱げる。⑫前のボタンがはずせる。靴下がはける。⑬かぶりシャツが着られる。⑭前のボタンが掛けられる。⑮前のスナップが留められる。⑯後ろのファスナーが閉められる・開けられる。⑰見なくても前のボタンが掛けられる。⑱肩のボタンがはずせる。⑲肩のスナップが留められる。⑳袖口のボタン・肩のボタンが掛けられる。

子どもの着衣行動は、したい気持ちをはぐくみつつ、片側のズボンの穴に両脚を通したりして遊びから入っていました。難しいものはそれとなくサボートしたり、えりあきや袖口寸法はゴムで調節できるものにしたたり、ゆるみ量にも配慮が必要です。

着衣行動が自信につながり自立への足がかりになると、個性ある人間としてみだしなみ・マナー、調和のとれた色彩や着装など、社会ルールを学び、そして独り立ちしていくのです。

子ども服に求められるもの

売り場には色とりどりの子ども服があふれています。安価なものから高価なデザイナーズブランドまで、選択肢はたくさんあり、大人の流行をかなり反映させたものまで見られます。腹部を強く圧迫するゴム、皮膚を傷つけるようなタグやアツプリケの硬い裏芯、肌にく痛く当たる縫い代、扱いにくいボタンや硬すぎる衣服素材、伸縮性が強くフィットしすぎ

るシャツ、丈が短かすぎる上衣、アイロンで変形してしまうスナップ、型くずれするシャツ、しゃがむと踏み込みそうな長いスカート、引っ掛かりそうなひもやリボンなど問題のあるものも見受けられます。

子どもが着やすく自分で体温調節できる扱いやすい衣服、健康性・安全性・快適性、動きやすさ、清潔に保つための耐洗濯性など、多くの性能が子ども服には要求されます。

心を着る

幼少のころの衣服にまつわる思い出を学生にたどってもらった中に、次の記述があります。「五歳のころ、赤いワンピースを買ってもらったことがありました。二歳下の妹がこれをとでも欲しがったのでサイズ違いを探したのですがどうしても見つからず、母はとうとう妹に同じような生地で作ってあげました。家事の合間に作った服、それを着た妹を見て羨ましく感じたことを覚えています。もう一人の

妹が着て、今は妹がかわいがついていた人形の服となつています。それを見るたびに、母が一生懸命縫っていたあの時の様子を鮮明に思い出します」。

何にも代えられない温かい愛情、心のこもった衣服を着て満足し、幸福感を味わい、そしてその服を慈しむ心をはぐくむ、幼いながらも心の豊かさを感じ取っています。

衣と遊ぶ

著者には娘の記憶がよみがえりました。従姉妹から姉そして妹へと着回されたパフスリーブの長袖ブラウス。袖口にはすり切れも少し見られましたが、大変なお気に入りでした。ハンガーに干してあるのに待てないこともありました。それを着た娘は背筋を伸ばし、手の平を差し出し、その上に私の手をのせてゆっくり、家の二階へ階段を上っていくのです。どうしてなのかと思いつつ、言われるままそれを繰り返していました。ある時、絵本の王子様がエ

スコートして宮殿の階段を上がっていく場面に目が留まりました。当時はやりの、ウエストで絞られた裾のふわつと広がるワンピースを着ていた私をお姫様に見立て、娘は王子様に変身してエスコートしていたのです。衣服を媒体に空想の世界に子どもはいざなわれ、変身の欲求は無限に広がっていくのです。

子ども服は感覚を満足させ情操を高めます。秘密のものや宝物を入れられるポケットなどにも夢が詰まっています。大人の価値観だけで選択して購入するのではなく、一度子どもの目線で子ども服を再考してみましよう。本来のヒトとして、子どもの衣環境はどのようなべきかを問いかげながら、心身の発達、自立促進とやる気の育成に役買える、子ども服が整えられることを願ってやみません。

(東京家政大学)

引用文献 岡田宣子「子供のボタンのかけはずし行動からみたしつけ服の設計」家政学雑誌第四七巻 一九九六

エリクソンの

「Dr.ボルクの

ライフサイクルに

ついての省察」から

津守 眞

賞など、私には無縁のものと思っていたのに、四月号に記したように、思いがけずペスタロッチー教育賞を頂くことになり、忙しく過ごした。ペスタロッチーの名前は倉橋惣三先生から早くに聞いていた。ペスタロッチーが妻アンナの死を悲しんで、とほとほと墓に向かう姿を思うと痛ましいと先生は何度か私に話されたことは、五十年経った今も忘れない。私の妻は、何度も大病をしたが、幸いなことに健在で、私自身はいつの間にかペスタロッチーが死んだのと同じ年齢になった。私が大学を辞めた時に始まった「保育研究グループ」はるにれ」の会で私は毎年二回話をするが、今年の二月には、エリク・H・エリクソン編『壮年期』という書物の中の論文、「Dr.ボルクのライフサイクルについて

ての省察」の第一部『野いちご』³という映画を取り上げることにした。エリックソンが晩年ハーバード大学で「人間の伝記的研究」という題目の絵演習を行った時、最初に学生たちにこの映画を見せてから本論に入ったという。私は、私の養護学校で毎月母親たちに教養講座と題して話をしてきた。エリックソンの話をした時に、ひとりの母親が『野いちご』のビデオをタピングしてくださいました。そのおかげで「はるにれ」の会でもこの話ができたのである。その話のあらずじはこうである。

七十六歳のスウェーデンの老医師、Dr.ボルクは、退職した町から生地ルントへ自動車の旅をする。その古代の教会で彼の五十年間の功績を記念して名誉博士号を授与されることになった。はじめは飛行機で行くことにしていたが、急に息子の嫁マリアンヌと一緒に自動車で行くことにする。これは彼の子ども時代にさかのぼるとともに、彼の未知の自分にまで深くさかのぼる象徴的な巡礼の旅となった。

ルントは私も行ったことがあるので、親しみを感じて映画を見た。私の友人であり、師でもあるエディット・フェルメール先生に案内されてオランダから汽車で行った印象深い旅だった。

最初に、Dr.ボルクが最近見た奇妙な夢が語られる。「ボルクはいつも朝の散

歩に行く。北国の夏の朝日に輝く街
並みはからっぽで誰もいない。眼鏡
屋の店に大きな時計がかかっている
が、その時計には針がない。その下

にかかっている眼鏡をかけた大きな目から血が流れている。ボルクは自分の時計を出してみると、それにも針がない。耳にあてると彼自身の心臓の鼓動が聞こえる。激しく感動して、その男は振り向いた。彼には顔がなく、直ちに倒れた」。

針がないとはいったい何なのかと私は長年考えていたが、ここで語られる一連の旅の途中の物語は、時間を超えた、どこにでも起こる、人生の中の出来事をさしているのかもしれない。

映画には幼い時の思い出の場所が現れる。恋人がいとこに奪われ、そのためにボルクは人嫌いになって研究に没頭する孤独な老人になる。興味深い旅の途中の出来事が語られ、遂に目的地に到着する。名誉ある式典になるが、ボルクは夜の歓迎晩餐会には出席しない。うれしいけれども若い時に思う華やかさは感じない。一日は終わり、時計が十一時を打つ。雨が降り始める。彼はもう一度、野いちごの小道を、幼い日から老年になるまでのことを思い起こす。

今回「はるにれ」の会で、私は長年、共に保育を学んできた若い人たちと一



緒にこの映画を見ただけでほとんど講演をせずに終わった。年齢も違い境遇も違う保育者たちはそれぞれに考えることがあったと思うのだが、私の話がなくて寂しかったとの感想を寄せてくださった方もあり、自分の思いに任されてよかったと言う方もあった。私は申し訳なかった気もするが、共通体験の場を提供することで役を果たしたのではないかと思う。その日の保育は、誰にも教えてもらえない、それぞれが自分で考えて実践するというよりほかないという厳しさがある。

誕生から毎週つき合ってきた、私共の幼い孫は五歳になった。途中の一日一日は長いが、過ぎればあっという間である。今は大人と一緒に仲間のよう雑談する時もあるが、その子の真面目があらわれるのは、ひとこまずつ、丁寧な本気につき合った遊びの中である。遊ぶ最中に思いがけない友達との出会いによって道筋が変えられるときもある。ボルクは旅行をするのに、最初はスピードの速い飛行機を予定していたが、出かける寸前に息子の嫁と一緒に行くことを選んだ。その若い婦人が老ボルクの心に掛かっていた悩みを解く糸口を与えた。婦人もまたボルクとの対話の中で悩みが溶けていく。老人は自らの人生を思い起こし、その時々自分の在り方を考えるとき、仄かな悔いもちりばめられていようが、むしろそれによって人生の新たな洞察を得る。一生涯は飛

行機のように一直線に目的地に向かうとは違う。偶然に出会う道連れを、はじめは煩わしく感じて、そこに意味を見出すことによって、思いがけない豊かな人生になる。

途中、自動車に乗せることになった若者たちとのやりとり、さらに険悪な中年夫婦を乗せるが、やがて、一緒には旅することができずに夫婦を車から降ろして別れることになる。まさに人生の旅にもそのような場面があることを知った。

旅の終わりに、若い息子の嫁は新しい生命を宿していることを告げる。ボルクは、旅の疲れでぐったりしているが、それらを抱えながら、ベッドに入るところでこの映画は終わる。
(保育研究者)

参考

- 1 Adulthood Edited by E. H. Erikson New York: W. W. Norton & Company, 1978.
- 2 Reflection on Dr. Borg's Life Cycle
- 3 『野いちご』イングマル・ベルイマン監督 一九五七年 スウェーデン

訂正とお詫

* 四月号8頁1行目の「二〇〇二年十一月二十七日」は、正しくは「二〇〇六年十一月二十七日」の誤りでした。訂正してお詫びいたします。



ある日

撮影・平野 清

子どもと保育の情景 (7)

「話を聞く態度」をめぐる覚書

戸田雅美

何年前か前、ちょうど修了間近の五歳児のクラスで、修了にあたって幼稚園の思い出を一人ずつが前に出て話すという場面を見た。たまたま、その場面を一緒に見ていた小学校の教師の経験があるという指導主事の先生からは、「もうすぐ小学校でもありますし、話を聞く態度やみんなの前で話すことをもっと経験させておく必要がありますね。子どもたちは、話したい気持ちはある様子だけでも、慣れていないせいか、自信をもって話せていないように見えました」というよう

なコメントがあつた。

私も同じ場面を見ていたので、この先生のコメントに半分納得しながら、半分疑問に思っていた。この場面を振り返ってみると、確かにすぐに隣の子と関係のないおしゃべりを始めてしまう子どもがいて、担任が注意することもしばしばであつたし、前に出て発言すべき子どもが、もじもじと話せない場面もしばしばあり、担任が話を促すことが多かったからである。しかし、私には、これは「経験させておく」「慣れる」と

いう問題なのだろうか：という疑問が残ったまま、そのことを十分に整理できないままに過ぎていた。

その後、別の園で、同じように、クラスの全員が集まって、修了にあたって幼稚園の思い出を話し合っている場面を見ることになった。

クラスのみんなが集まると、幼稚園での思い出を話し合いたいということ、その話し合いをもとに修了式図を担任が話すのを子どもたちはわくわくしながら聞いている。どうやら、飼育している動物の当番を四歳児に引き継ぐ活動などを通して、「修了」ということが実感されているところらしく、担任の「修了式」という言葉に、隣の子どもとちよつと抱き合ったり、顔を見合わせて照れくさそうに笑い合う子どもがいる。それがほかの子どもたちにも伝播して、そのざわめきが「わくわくしながら聞いている」と私には感じられ

たのである。

担任にもその気持ちが伝わったのか、そのざわめきを特に注意することなく、にこにこ見守っていたが、「どんなことがあったか、話したい人はいるかしら？」と尋ねる。すると、さつそく手が挙がり、「じゃ、みゆきちゃん」と指名されたみゆきが立ち上がる。みゆきは、「みんな、みんなのコマが回るように回したこと」と言う。聞いていたクラスの子どもたちの中から「修了式にみんなでコマ回したい！」という声上がる。担任は、「修了式でコマを回すのか：!? うーん、考えてみないとね。でも、コマ回し楽しかったね。グループでみんなのコマが回るかを試したじゃない? グループのみんなのコマが全部一斉に回るように頑張つて、一斉に回ったときはうれしかったよね」と、とても楽しそうに受け止める。「ほかにあるかしら?」と聞くと、だいちが、「お餅つきしたこと」と言う。子どもたちは、近い過去から思

い出していくらしい。すると、担任は、「あー、だいちちゃんのお父さんもお手伝いに来てくれたものね」と手で餅つきのふりをしながら受け止める。すると、聞いていた子どもたちも次々と餅つきのふりを始め、中には立ち上がって本格的に餅つきのまねをして見せる子も出てくる。あらあら、楽しくって身体が動き始めてしまったな、聞く気持ちが崩れてしまうかしら…:と思いながら私は見ていた。

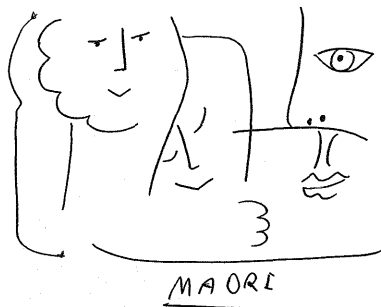
ところが、担任がまた次を促すと、子どもたちも席に戻って、次の子どもの話を聞く。子どもが次々に発言するたびに、担任も「そうそう、そうだったね!」ととても感動してうれしそうに受け止め、担任自身の言葉がこれも楽しそうに加えられていく。

このようにして、二十分以上の時間が過ぎていき、ちようと、遠足の話になったとき、何人かの子どもたちが、もう我慢しきれない、もっと詳しく話したいというように、担任のそばに行つて、一人ひとりが話し

始めた。担任も、席に戻るように注意するのではなく、近くに来て話しかける四人の子どもたちと、楽しそうに会話を始めてしまった。

おやおや…、この四人はいいけれど、ほかの子どもたちはどうするのだろうか? と見ていると、それぞれが、近くに座っている子どもも同

士が近くに座ってしまった。自由に席に座っていたので、友達を始めてしまった。自由が近くに座っていただけで、友達同士が近くに座っていただけでもあったのかもしれない。クラス中がにぎやかになる。考えてみれば、しばらく、挙手しては一人の子が話すということが続いていて、それを聞くうちに、それぞれの子どもが、自分



にとつて大切な幼稚園での出来事を思い出し、誰かに聞いてもらいたくてたまらなくなっていたのかもしれない。ただ、聞いてもらいたい相手は、必ずしも今すぐに担任である必要がないから、全員が担任の近くに集中してしまうことがないだろう。どうやら、近くの友達同士、互いに話しては聞き合っていることで十分に満足できている様子である。

しばらくするとまた、担任を中心としての話し合いに戻るといふことが続き、とうとう四十分以上もクラス全体で話し合った末、「また明日もこの続きをしよう。まだ忘れていることもあると思うから、みんなで思い出しておいてね」という担任の言葉でこの時間は終わった。それでもまだ、友達同士話しながら、いすを片づける子どもたちの姿があった。

小学校低学年での学級崩壊が問題になってからだろうか、クラス全体で話を聞く態度やクラス全員の前の

話をできることが、就学前に強く求められるようになった。小学校一年生で四十人にもなるクラスでの授業がはたして適切なのか、という議論は重要ではあるがあえてここでは触れないとしても、クラス全体で話を聞き、話すことは、単に「態度」や「能力」や「慣れ」の問題ではないだろう。さらに、単純な意味での「経験」の問題でもないだろう。そのためには、話をする意味、聞く意味が理解できる「経験」や受け止めてもらえることのうれしさや受け止めるということのおもしろさが理解できる「経験」が不可欠である。また、もう一つ、話しても聞いてもうれしい、そんな人間関係の集合としてのクラスが必要条件になるはずである。

この日の話し合いの場面から、私は、これまで抱えていた問題を整理する、一つのヒントを与えられたように思った。

(東京家政大学)

◎ 観察者と保育者の対話 (4)

…観察者から保育者へ 一月三十一日(水)

小日向台町幼稚園で観察を始めて、もう四年目になりますが、三歳児を腰を据えて見るのは今年度が初めてです。毎回、子どもたちの発想や矢継ぎ早に展開する遊びの様子に、驚かされたり感心したりしながら、新しい発見や多様な気づきを経験しております。

きょうは、天気もよく、暖かかったこともあり、ほとんどの子どもたちが外に出ていました。一学期から、S君やK君は、まず部屋で、武器(ヒーローになるための道具)を作ってから外に出て、三輪車に乗りながら戦いごっこをする様子がよく見られました。しかし、最近はお互いの戦いごっこに対するイメージの違いに二人とも気づき始めているけれども、それをお互いに伝え合っていて、新しい動きやストーリーを展開することまではまだ

うまくいかないのか、どこか単調でおもしろさに欠け、不完全燃焼になってしまっているように感じています。きょうも、S君はいつもと同じように武器を持って三輪車に乗っていたのですが、途中で地面に仰向けに寝転がっていたり、どこか所在なさげであるように見えませんでした。

そんな中、先生が砂場に入って数人の子どもとスコップで地面を掘り始め、しばらくして山を作ることになりましたね。途中からS君やほかの子どもたちも砂場に誘われるようにやってきて、最終的には多くの子どもたちと一緒に大きな山を作り上げていきました。私から見ても、大きくて、姿形も富士山のように格好良い魅力的な山でした。

期半ば、徐々に砂場に入ってくるようになり、少しずつ遊びの積み重ねをする中で、砂遊びの楽しさを感じ始めています。

この日は、数人の幼児が砂場で型抜き遊びをしていました。その横で四歳児が山を作りかけていました。途中で四歳児はいなくなり、小さな山が残っていました。以前、四歳児が大きな山を数日かけて作っている姿を見て、憧れを感じていた三歳児の一人がその小さな山を見て「ゆりさんみたいなお山を作りたい」と言うと、傍にいた数人が同意し、山作りになりました。憧れから自分たちもやってみよう、という思いがでてきました。私はその思いを大切にしていきたいと思い、一緒に山作りをしました。砂遊びはいろいろな発見ができる遊びの一つだと思います。S君には砂遊びのダイナミックな楽しさ

…ふたたび観察者から保育者へ

三歳児にとっては一日一日がそれぞれ特別で、毎日新しい世界に飛び込んでいくようなものかもしれないです

を感じてほしいと思っています。また、みんなで一つものを作る、それで充実感を味わえるようになってきたのが、この時期なのだと思います。今回はその機会になつたと思います。

残念ながら、この山はほかの幼児によって壊されていき、翌日の砂場に山はありませんでした。しかし、そのことに気づいたのか気づかないのか口にした幼児はいませんでした。

翌日、中学生のボランティアのお姉さんが砂場で一緒に遊ぶことになりました。そこで初めて「あれ、山がなくなっている!？」と数人が気づきました。おかしいな、と言いながら中学生と一緒に山を作り、トンネルを作つて遊ぶことができました。S君、H君ももちろん、ほかの友達も一緒に作ることができました。

二月七日(水)

ね。しかし、子ども自ら、「前日の遊びの続きをする」という明確な目的をもって登園し、前日の遊びを次の日

につなげていくことはまだなくとも、あの山作りが子どもにとって一つの大切な経験だったからこそ、砂場に行った時にハッと思い出す子どもがいたのですね。

きょうは子ども会(生活発表会)のリハーサルで、部屋の様子も、いつもとだいぶ違いました。後ろには、いすがずらっと並び、いつもあるおままごとや絵本コーナー、工作コーナーもなく、そこは「てぶくろ」の舞台に変わっていました。子どもたちは「見せる」というはっきりとした意識はなくとも、お辞儀をしたり、大勢の人の前で何かをすることはもしかしたら入園以来、初めての経験だったのではないのでしょうか。

印象に残ったのは、先生の指示が特別にあつたわけではないのに、ねずみになって一番最初にてぶくろに入つたじちゃんとTちゃんが、ほかの動物がてぶくろに入ってくる時に、友達が入りやすいように入り口を二人で開いて持っていた姿です。状況を理解して、自然と仲間のことにも気づいて思いやる二人の姿から、育ちをはっきりと見取ることができたように思います。また、おじい

さん役の先生がてぶくろを探しに戻って来た時、「てぶくろならここにあるよ！」と多くの子どもが落ちているてぶくろを指差して、先生に大きい声で教えていましたね。日君はてぶくろから飛び出て、落ちていててぶくろを拾って先生に渡そうとしていました。

日常の遊びや生活から完全に切り離し、特別な状況を設定して劇を見せようとするのではなく、日々の流れの中に子ども会が自然に位置づけられているからこそ、きょうのような少し非日常な状況であっても、先生と子どもが自然に応答し、子ども一人ひとりが無理をすることなく、多少興奮しつつも、日々の遊びや生活の中で積み重ねたものをさまざまな形で素直に表現できていたのだと思います。とはいっても、同じ空間や時間を皆で共有してつくり上げていく子ども会のような行事は、やは



り、子どもにとっても、普段の遊びとは違ったどこか特別なものでしょうね。先生にとっても、子ども会はもちろん特別なものだと思います。このような特別な状況だからこそできる子どもの経験があり、先生の側でも新し

…ふたたび保育者から観察者へ

リハーサルを手伝っていただいて、ありがとうございます。想像していたよりも「お客さんが来ている」ということに対して、物おじししない子どもたちで私も驚きました。

確かに、普段の生活の中で、ぬいぐるみの「お客さん」の前でお辞儀をして歌を歌ったり、楽器を鳴らしたりしていたことはありますが、本物の「お客さん」の前でも役になりきって動いたり、歌を歌ったりした子どもたちのたくましさに驚きました。

三歳児にとつての子ども会は、子ども本人がいつもの遊びと同じような、楽しめるものをねらっています。保

い気づきがたくさんあったのではないかと思います。先生の子ども会への思いや、一連の子ども会にまつわる子どもの姿を通して新たに発見されたことなどあればぜひお聞かせください。

二月七日（水）

護者に見せるためでも、お客さんに見せるためでもなく、普段の遊びと同じようになりきったり、歌を歌ったりすることを楽しむことを大切にしています。子ども会も、遊んでいる様子をたまたまおうちの人が見てくれて、それがうれしい、と感じるような雰囲気をつくりたいと思いました。

子ども会の劇遊びの題材は、子どもと一緒に読んだ絵本で楽しめたものを選びました。登場人物（動物？）は年間を通して、子どもたちがなりきって遊ぶことを楽しんでいたものでした。ですから、きょうのリハーサルもいつもとは雰囲気が違う保育室ではあるけれど、遊びに

使っていた小道具を設定しました。なりきって遊ぶことが好きな子どもたちは、たちまちお面をつけて動き出すと、Aちゃんが「ここはてぶくろのお家ってことね」と言い、しまっていたままごと道具を出してきて、いつものように場をつくり始めました。この姿が三歳児の姿なのではないかと思えます。

また、劇のストーリーを絵本やペープサートなどで繰り返し楽しんでいたのも、話の盛り上がりがわかり、そのタイミングを楽しめる姿がありました。だからこそ、皆の気持ちが一つになってお話を作ることができたのだと思えます。

人前での緊張感の中で、自分なりに表現することを楽しんでいく、という経験は、この「子ども会」という中で味わうことができる大切な経験の一つであると思います。「お家の人に見てもらった」という喜びやうれしさ、「できた」「やった」という感情を三歳児なりに味わい、快感情をもてたのだと思います。

十月の運動会では母親から離れられなかった子どもが、子ども会当日は離れて自分の役になりきって表現を楽しんでいました。運動会も子ども会も大勢の人の前で行動する活動ですが、今回の子ども会でも子どもが安心して活動できた要因を考えると次のようなことが考えられました。

①場が保育室で慣れていたこと。

②言葉のやりとりなど、劇遊びそのものが楽しかったこと。

③人に見てもらおう「晴れがましい」体験に喜びを感じるようになったこと。

などが挙げられます。

子どもたちが皆楽しめて、「また、やろうね」という言葉が出たことが、何よりもよかったと思います。

観察者 横井紘子（お茶の水女子大学）
保育者 前田宏子（小日向台町幼稚園）

若手研究者からの報告 (2)

Tちゃんの変化の中に 観察者(部外者)としての私がいいた意味

金 允貞

韓国の保育園で、保育士として毎日子どもたちと過ごした私は、日本に来てから子どもたちの遊びを外から「観察する」機会を得ることができた。それまで私は、「観察」というものが人であれビデオなどの機械であれ、ただ見えるものをそのまま映すことだと思ってきた。しかし、一年以上観察を続けながら、観察というものが、ただ私が子どもを「見

る」ことだけではなくて、見ている私を子どもも見る、互いに「見る―見られる」関係にあること、それによって「新しく何かが生まれる」ことについて考えることができた。

通年の観察授業において、0幼稚園で一人の年中組の女の子(以下Tちゃんと呼ぶ)を約一年間観察してきた私は、Tちゃんの変化やTちゃんと保育者

との関係の変化、Tちゃんと子どもたちとの変化などを見る事ができた。そして、その変化の中でTちゃんが幼稚園の外部者から内部者になっていくのを見た。また、その過程で、観察のために外部から幼稚園に入った私に働きかけてくるTちゃんの姿に変化があった。週一回の観察者にすぎなかった私ではあるが、Tちゃんにとっては意味ある存在だったのではないかと思うようになった。

《記録》

二〇〇五年五月二十四日

積極的に話しかけてくるTちゃん

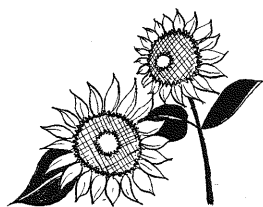
Aちゃんと鶏小屋で遊んできたTちゃんは先生におんぶしたあと、降りてクラスに入り、ビニール袋に水を入れて持ってきた。ほかの観察者に結んでもらおうとしたが、できなくて私の所に持ってきて「結んで」と言い、結んであげると、「そうそう」と

言った。そのビニール袋をほっぺにつけたり写真屋のおじさん（カメラマン）に見せたりしながら庭をうろろろし、急に私の所に来て肩に登り、「立ってごらん」と言った。私が立つと、「歩いてごらん、あそこまで」と言い、私が「あそこで降りましょう」と言うと、降りてから花壇を片づけている年長児を見たり、ウサギを見たりして庭をうろろろする。それから赤い実を持ってきて「これなに？」と私に聞いて、私が「そうね。何かな？」と言うと、年長組の先生に聞いてから私の所に戻ってきて、「これ名前が蛇だって、食べちゃだめだって」と言いながら私に「あげる」と言った。

観察を始めたころは、Tちゃんは明るくて自分の意見や要求をちゃんと話していたので、友達の間でも活発に遊ぶ人ではないかと思った。しかし、友達とあまりかかわりをもととせず、また、一緒に遊

んでいても自分からその場を離れたり、友達からの言葉かけにも返事をしなかつたりして、遊びが続かない場面が多く見られた。その反面、先生や周りにいる大人には自分からすぐ話しかけたりいたずらをしたりした。特に、私が毎週続けてTちゃんを見にきていることを気にしているようで、Tちゃんを見ていると必ず私の所に来て、何かを話しかけた。

私は、Tちゃんが私に関心を見せる様子が、ほかの子どもたちが時々示す関心とは違うことを感じた。私に対するTちゃんのかかわり方は、ただの観察者として私を見るのではなく、私に、より深い関係を求めている気がした。どうしてTちゃんはほかの子どもたちと違って、私にはつきりした関心を見せるのか。Tちゃんは私とのかかわりを通して何を



求めようとしたのか。Tちゃんは、保育者に、だつこやおんぶしてもらいたがつたり、保育者のそばにいたりしようとすることが多い。ずっと自分の所にいられない保育者と違って、ずっとTちゃんだけを見ている私に自分のことを手伝うように話すのは、当たり前のことだったかもしれない。

《記録》

九月二十七日

Tちゃんを観察することのつらさを感じる

園庭に出たTちゃんは一人で砂場に入ったあと、山への坂道にY先生がいるのを見て、先生の方に向かっていった。Y先生と一緒に山に登ろうとしたTちゃんは、一人で降りてきて、また少し山に登ったり降りたりを繰り返した。その後、花壇のはじっこに隠れて遠くからTちゃんを見ている私を見始めた。しばらくそのまま私を見ていたTちゃんは、花

壇のはじつこの方から徐々に私の前に近づいてきて座り、砂を集めて少しずつ落としてから自分の頭にも砂を何回も落とした。

二学期最初の観察日、私は夏休みの間Tちゃんがどう変わったのかを考えながら幼稚園に入ったが、一学期とあまり変わりなく、工作をしながら先生にくつつこうとしたり、話しかけたり、一人で園庭に出てうろうろしたりするTちゃんの姿を見た。私がTちゃんを見ていることをTちゃんが気にしていると考えて、この日は、Tちゃんがかかわってこないように、なるべく遠い所からTちゃんを見たり、Tちゃんを見ないふりをしたりして観察を続けた。その後、園庭に出たTちゃんが自分の髪に砂を落とした時には、どうしたらよいかわからなくなり、Tちゃんがすぐかわいそうに思われた。Tちゃんを見ている私の方に近づいて座って砂を頭に落とす

ことを見て、その行為がまるで『どうして自分を避けてばかりいるのか』と私に話しかけているような気がして、とてもつらくなった。そしてTちゃんを観察するのがTちゃんにとつては、本当はよくないことではないか、やめたほうがよいのではないかと思った。

《記録》

十一月一日

新しい関係をつくり出そうとするTちゃん

1. 紙箱で何かを作っていたTちゃんは、H先生に「先生来て」と言い、H先生は「はい、今行くよ」と返事をしてTちゃんの隣にきた。Tちゃんが「早く来てやって、テープはって」と言うと、H先生は「どこにつけるの?」と聞く。Tちゃんは「階段についたら」と言う。

H先生はTちゃんの隣に座ってTちゃんのことを

作りながら、ほかの子どもたちと話をする間、Tちゃんはほかの子たちの遊びや隣で絵を描いている男の子の絵をじっと見て、その子に何か話した。その時、H先生がほかの子に引つ張られ園庭に行ってしまった。それに気づいたTちゃんは、クラスの中

を見回しながら、「先生、先生、H先生、〇〇（姓）

H先生」と大きな声で呼び、いすの上に立って何回か「H先生」と叫んだ。いすから降りたあともTちゃんは小さな声で「〇〇H先生」とずっと呼び続けながら、隣の男の子の絵を見たり、ほかの友達と遊んでいるのを見たりした。

2. Oくんが園庭からカキを拾ってくる。H先生が皮をむいてあげると、Tちゃんは四、五人の子どもたちと一緒にカキを食べていた。

H先生が「もうすぐファイアランドに行くよ。少し片づけてから行こうか」と言った時、Tちゃんは急に私に飛びついてきて笑いながら「名前なんてい

うの？」と聞いた。私はびっくりして「うん、あとで教える」と答えると、Tちゃんは「なんで」と言ってH先生の隣に行つて、歌いながらクレヨンを片づける。

H先生がTちゃんのそばから離れた時には、TちゃんがすぐH先生を探しに行くのではないかと思ったが、TちゃんはただH先生の名前をずっと呼び続けた。名前を呼びながら、ほかの子の絵や遊びを見るTちゃんの姿は、それまでのTちゃんとは違う感じがした。TちゃんがH先生の名前をずっと呼んでいたのは、先生に自分の隣にいてほしいという気持ちがあったのだろうが、それよりは、「H先生は今自分の隣にはいないけど、どこにいても先生は変わらなく自分を考えているんだ、だから大丈夫」と、自分で自分を納得させ、Tちゃん自身の中で、先生の存在を確かめているように思われた。

カキを食べたあと、急に私に飛びついてきて名前を聞いた時は当惑したが、Tちゃんの声が明るく、今まで私に話しかけた時とは全然違う感じがした。ところで、Tちゃんはどうして私の名前を聞いたのだろうか。普通名前を聞くのは最初の出会いの時である。Tちゃんは今まで私とTちゃんの間であったこととは違う新しい関係を始めようとしたのではないだろうか。

全体的考察

Tちゃんの変化と

観察者としての私がいたことの意味

十一月の観察で、Tちゃんは先生が自分のそばを離れても先生についていかず、その場にいながら友達と話を続ける場面が見られた。一学期には先生の所に大勢の子どもが来ると、後ろに下がって先生から離れることがよくあったが、十一月の観察から

は、Tちゃんの隣に大勢の子どもが来ても先生から離れなかったり、先生と手をつなごうとする子どもたちとの間でTちゃんも積極的に先生の手を引っ張ったりすることが見られた。こういうTちゃんの変化はTちゃん自身の成長、友達と一緒に過ごす幼稚園の生活に慣れてきたこと、周りの子どもたちの成長や、それによる保育者の変化などが含まれてなされたことだと思われる。そして、そういう変化を通してTちゃんはだんだん幼稚園の中に入ることができただろう。

さて、そういうTちゃんの変化の中で私はどんな意味をもった存在であっただろうか。

約一年間、Tちゃんは私の名前も知らないままずっとかかわってきた。それは私が幼稚園の中の人ではなく外部から来た観察者だったから可能だったのだろう。名前を知らないまま関係が続いていることはあいまいな状態になる。私がそういうあいまい

な人だったにもかかわらずTちゃんがずっと働きかけてかわりをもととしたのはなぜだろう。それは、Tちゃん自身が幼稚園の中で、まだあいまいな状態でいたからではないだろうか。幼稚園の内部にいなながらも、その場で自分のありのままで過ごせる確かな内部者になれなかったTちゃんは、担任の保育者や幼稚園内部の保育者に強くかわりを求めることよって内部者になりたいことを表したのではないだろうか。その反面、外部から来た私には、外部者であることに同情し心地よさを感じたのではないだろうか。

Tちゃんが私の所に来なくなったのは、私に名前を聞いたあとからである。Tちゃんにとって名前はどんな意味をもっているのだろう。H先生の後ろを追わないで先生の名前を呼び続けたことと、その後、私に名前を聞いたこととは何か関係があるだろうか。

名前はその人の存在を明確にしてくれるものである。そう考えると、TちゃんにはH先生の存在が明確になつていくことがわかる。そして、今まで名前も知らなかったあいまいな状態であった私の存在も明確にしたかったのかもしれない。Tちゃんが私の存在を明確にしたくなつたのはTちゃん自身の存在が明確になつてきたからではないだろうか。そういうTちゃんの問いかけに私は「あとで教える」と私の存在をあいまいなまま残しておいた。

その後、Tちゃんは私を見ても何のかかわりもとうとしなくなり、私はTちゃんに意味のない人のようになつたが、そのことは、よりTちゃんには意味があると思ふ。もうTちゃんには私のようなあいまいな存在は必要ではない。だからこそ私は十分Tちゃんに意味のある存在だつたのではないだろうか。

(お茶の水女子大学大学院)

【寸評】

Tちゃんは三年保育の幼稚園に四歳児から入園した子どもでした。新入園児がよそから来た観察者やお客様の所に寄ってくることは珍しいことではありません。新しく入ってきた子どもたちは幼稚園で起きている遊びや出来事を周辺からよく見ており、外の人たちにも敏感です。周辺には多くの学びの可能性があり、コミュニティにおけるアイデンティティー形成（所属感を含む）に重要な意味があることを指摘したのは、文化人類学者のレイブとウエンガーでした（Lave & Wenger, 1991/1993）。

一方、外から来た観察者は、保育の妨げにならないよう子どもたちの様子をそっと見ていま

す。この観察者にTちゃんが助けてくれる大人として積極的にかかわったのはなぜでしょう。それはずっと自分のことを見ていてくれる観察者のまなざしが、Tちゃんへの「かかわり」そのものになっていたからではないでしょうか。保育者のように声をかけたりするわけではないけれども、見ている観察者もまた生きた存在者として保育の場に在ることに気づかされます。そして、名も知らない観察者にかかわりを求めているTちゃんが、ある時、観察者の名前を確かめ、その後、観察者の所にはもう来なくなっていく姿に、しっかりとここの幼稚園の人となっていく成長のプロセスがよく表れています。

（刑部育子記）

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(7)〉

バオバブ保育園訪問記

―いずみナーサリーの保育実践へつなぐ―

塩崎 美穂

「ちいさな家」と「おおきな家」へ

幼保プロジェクトのメンバーで、東京都多摩市にあるバオバブ保育園¹⁾を訪問した。社会福祉法人バオバブ保育の会には、聖蹟桜ヶ丘駅前にある〇歳から二歳までの「ちいさな家」(二〇〇一年開設)と、そこから歩いて十分ほどの所にある〇歳から五歳までの「おおきな家」²⁾(一九七三年開設)がある³⁾。私たちは秋の土曜日に、「ちいさな家」と「おおきな

家」の両園を、遠山洋一園長に案内され、見学する機会に恵まれた。

私たちが「ちいさな家」を訪ねると、お父さんたちが組んだという木の固定遊具、木々や草花、菜園のある園庭に迎えられた。おしゃべりな九官鳥もいる。園庭が、子どもたちの生活空間であることが一見してわかる。園庭(室外)から連続した造りになっている室内に入ると、遠山園長は、「ここをつくる時、子ども目線で外が見える低いガラス窓にこ

だわったんです」といわれた。なるほど、部屋には、ちいさな子どもたちが這った姿勢からでも外が眺められる窓がある。「それ（低い窓）がだめならここは引き受けないといったんですよ」と、口数の少ない遠山園長が笑いながら教えてくださる。そして静かに「子どものためには譲れないことがありますね」ともおっしゃった。

「ちいさな家」は乳児保育園で、三歳になったら「おおきな家」に合流する仕組みになっている。いずみナーサリーも「ちいさな家」と同じように〇～二歳児を対象としているが、「おおきな家」のように連続性のある保育の場をもたない（附属幼稚園には接続しない）。学生を含む大学関係者のための「職場保育所」的な形態をとっているため、利用者の子どもたちの家は離れた地域にある場合が多く、卒園後には別々の保育園や幼稚園に移っていく。今回私たちは、「おおきな家」（〇～五歳を同一空間で



▲低いガラス窓

連続的に保育する園」と「ちいさな家」(〇〜二歳を一区切りとして保育する園)の違いやつながりを学んでみたいと思ひ、訪問した。

バオバブ保育園の遠山園長は、待機児の多い乳児のための保育園設立・運営を市から打診された際、園長と調理室を独自に置くことのできる独立園であることを条件にされたという。実際に「ちいさな家」には、遠山さんという園長がおり、安全でおいしい食事を作る独自の調理室がある。つまり「ちいさな家」はバオバブ保育園(おおきな家)の分園という形をとっていない。それでも「ちいさな家」の子どもたちには、卒園後、「おおきな家」に合流できる仕組みが整えられているということだ。

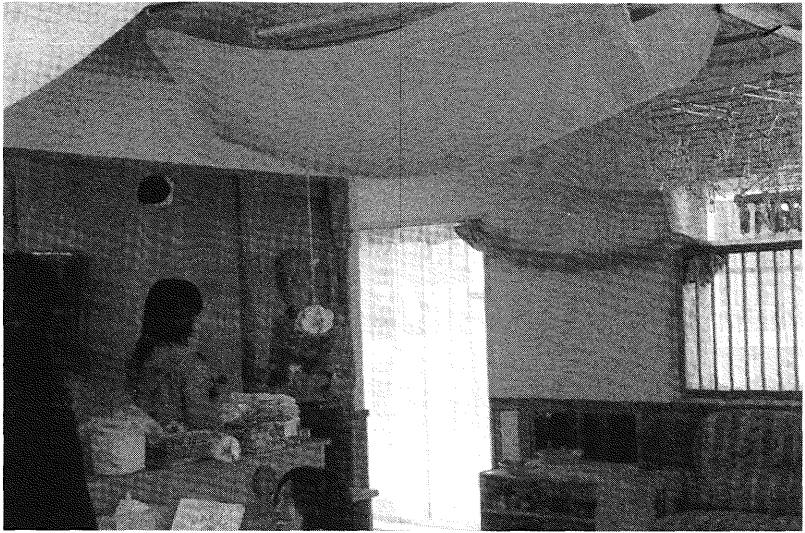
二歳から三歳というジグザグと育っていく「お年ごろ」の時期の子どもたちにとって、どのような保育環境が望ましいのか。昨今の家庭状況も考慮しながら二〜三歳前後の保育についての議論を重ねるこ

とは、今後の保育制度構想には欠かせない点である。同一敷地内に〇〜二歳の保育園、三〜五歳の幼稚園(預かり保育つき)という形で幼保一元化を進める「認定こども園」、二歳児を受け入れ始めている幼稚園、〇〜五歳の連続した育ちの中で二歳や三歳を保育する保育園など、現在、二歳から三歳前後の子どもたちは実に多様な保育制度の中にいる。乳児と幼児を別施設で保育するヨーロッパ諸国の就学前教育制度などにも学びながら、今後の乳児と幼児の接続については考えていく必要があるだろう⁵⁾。

「他園を見る」ことで日々の保育実践を振り返る

保育歴二年の川島さんは、バオバブ保育園訪問の感想を次のように語っている。

まず感じたことは、園全体に温かい雰囲気の流れている、ということでした。「温かい雰囲気」



▲布で覆われた照明

がどこからくるものなのか、施設の設備一つひとつを見ていくと、徐々にわかってきました。

一つは照明です。普通の蛍光灯をレースのような布で覆うことで、人工照明独特の刺激のある明かりが緩和され、自然光に近い穏やかな光が部屋を包んでいました。

もう一つは空間構成です。寝食がかかわる空間と遊びの空間が区切られていることで、子どもたちの中で生活の切り替えがスムーズにできるようになっています。また、遊びの空間のみにおいても三か所程度に分かれ、小グループになり集中して遊べるようにされていて、子どもが充実した園生活を送ることができるような配慮が行き届いていました。

小さな子どもに配慮した採光や照明、空間を小さく区切って生活や遊びを構成する在り方など、日本

の乳児保育実践の中で気づき、つくられてきたことの蓄積、保育の環境構成の智慧に触れたことは、川島さんのような若手保育者にとって、自園とは異なる保育を知る新鮮な経験だったと思う。いずみナーサリーではその後、保育環境としての玩具についての見直しを始めている。訪問から、自分たちの保育を振り返る機会を与えられた。

どこでも事情は同じだろうが、保育時間の長い保育者の研究時間は確保しづらい。長時間労働下では、職場内での交代制など勤務調整をしながら研究時間を確保しなくてはならない。問いの前に立ち続けるという「保育の構え」を持続可能にするためには、保育者自身が、今の保育が最善のものとして生成されているかどうかを考察する時間が必要である。日常の保育から少し目を転ずる機会が、日々の保育を可視化することもあろう。忙しく、ルーティーンワークに埋没してしまいたい時こそ、研

究時間の確保が大切ではないか。

保護者とのつながり

次が保育経験年数の長い増田さんの感想である。

バオバブ保育園ちいさな家の玄関に入ると、遠山園長先生が見学の私たちを笑顔で出迎えてくださった。

私は、保育園の温かい雰囲気とゆったりした時間の流れに感動しながら、先生の物静かで、何をしてもし受け止めてくださる人柄がバオバブ保育園の雰囲気をつくっていると思った。

部屋の入り口のネームプレートが絵本の一ページのようで素敵だったのでうかがってみると、保護者の手作りとうわかり、びっくりした。○歳クラスの手すりにはめこんでいる木彫りの動物も、元職員の手作りと聞き、部屋のいろいろな所に保育



▲ウサギのぬいぐるみ

園を愛して協力してくださる人たちのぬくもりを感じた。

二歳クラスに置いてある、ウサギのぬいぐるみは、お母さんたちが自分の子どものために布を選んで手作りした、世界に一つしかない物だった。そのぬいぐるみには、離れていても常に保育園で遊んでいる子どものことを思っているお母さんの愛情が感じられた。

バオバブ保育園には、ぞうの会という父母と職員が自主的に運営している会があり、親睦会やフェスタ、親子観劇会、文庫の活動を行っている。と聞く。子どもたちのまわりにいる大人たちが時間を共有し、いろいろな活動を積み重ねている歴史が遠山先生を中心とした保育園を支えているのではないかと思ひ、とてもうらやましく感じた。まだ年月の浅いナーサリーが保護者とこれからどのように時間を重ねていくのか、今後の課題だと

思う。そして、明日の保育への活力をいただいで
帰途についた。

増田さんの指摘どおり、保護者とのつながりは保
育園の保育を構成する大事な部分である。遠山園長
は「やってみて気づいたのですが」と、第一子は
「ちいさな家」、第二子以降は「おおきな家」と、希
望園に差があることを教えてくださった。初めての
子どもの親は乳児のみの静かな園を求め、子育て経
験のある親はきょうだいも一緒に送り迎えのできる
にぎやかな園を求める。人数配置などでは同じよう
な条件の乳児保育を用意していても、そこに集う保
護者には有意な差が出てくるということである。保
育制度や保育施設という大枠（乳児保育をするとき
に幼児がいる園かどうかなど）は、意外にも私たち
のミクロな人間関係を規定していることがわかる。

また遠山園長は、「保育者と親との関係は、同じ
時代を共に生きるもの同士という対等な人と人との

かわり、相互主体的な関係だと思えます。難しい
ですけどね」ともおっしゃっていた。これには、バ
オバブ保育園の乳児保育の奥深さを改めて考えさせ
られた。保育者とはかく、大人中心の社会の中で子
どもに寄り添おうとするあまり、「子どものため」
を振りかざし保護者を糾弾しがちである。子どもを
急がせないで、ありのままを受け止めて、と。それ
は一見正しい主張のようではある。しかし、親も保
育者も相互に主体的になり、対等な関係になれば
子どもの生活は護れないと遠山園長はおっしゃるわ
けだ。親は「お客様」でないことはもちろん、「指
導」の対象でもない、同じ時代を共に生きる者だと
いう。遠山園長の何気ない言葉や、親と共につくっ
てきた保育から、多くを学ぶことができた訪問で
あった。

（お茶の水女子大学）

☆お茶の水女子大学附属いずみナーサリーの川島明希子
さん・増田真理子さんに協力いただきました。

註

- 1 バオバブ保育園の保育実践については、遠山園長の「園だより」を編んだ『バオバブ広場によるこそ！』一九九七年、『バオバブ広場出会いの日々』一九九九年、『泥と水と虫と子どもとおとなと』二〇〇三年、『子どもの力 おとなの力』二〇〇六年（以上すべて筒井書店）に詳しい。
 - 2 内部的に「おおきな家」と呼ばれる園が「バオバブ保育園」、「ちいさな家」と呼ばれる園が「バオバブ保育園ちいさな家」である。
 - 3 この多摩市の二園以外に、稲城市（若葉台バオバブ保育園・一九九九年開園）と横浜市（バオバブ霧が丘保育園・二〇〇六年開園）にもバオバブ保育園がある。
 - 4 「乳児」とは児童福祉法の定義では〇歳児を指すが、ここでは保育所保育において、一般的に「乳児」とされる〇・一・二歳児クラス在籍児を「乳児」と呼び、「乳児保育」とは〇・一・二歳児クラスの保育を指す。
 - 5 「ちいさな家」は〇歳九人、一歳十一人、二歳十二人、一時保育十人強の園。「おおきな家」は〇歳九人、一歳十三人、二歳十五人、三歳十三人（「ちいさな家」からの進級児中心）と十五人（「おおきな家」からの進級児中心）、四歳二十八人、五歳二十八人、一時保育十人強の保育園で、二クラスに分かれている三歳は、比較的早い時期から一体で行動するようになるという。
- たとえば現在フランスでは、保育の研究課題の一つに「乳児期と幼児期の接続」があげられるという。フランスの場合、三、五歳の幼児学校（スכולマテルネ）と小学校との接続はカリキュラム上も教員の互換性からもスムーズであるが、乳児保育と幼児学校の不連続が課題になっている。「保・幼・小の接続」という形で就学前教育と学校教育の接続に課題の現れている日本とは事情が異なる。保育・教育制度を構想する上で、どの年齢段階で施設の移行という「段差」を設けるのか、あるいは設けないのか、今後の検討課題であろう。

編集後記

少子化対策で躍起になっている省庁の大
臣が、「女性は子どもを生む機械」と発言
して大いに問題になった。人道やら権利や
らの問題よりも、女性の一人としてなんと
もいえない生理的な嫌悪感とやりきれなさ
を感じた。とはいえ、その直後に出生率が
少し上向きになったというニュース。もち
ろん時間的な関係はないのだが「機械発
言」ぐらいで今さら女性が子どもを産む気
をなくすかなどは関係ない、女は大昔から
そんな発言には鍛えられているのだという
気持ちになった。

「赤ちゃんポスト」の方はどうか（ドイツ
では「赤ちゃんドア」という意味に近い表
現らしい）。ポストにほとんど落とすの
か？ 人を物扱いすることに慣れたまなざ
しを感じる。 (H)

幼児の教育 第106巻 第7号

平成19年7月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集部 河合聡子
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社 フレーベル館
☎03-5395-6604 (編集)
振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円 (本体524円)
©日本幼稚園協会 2007 Printed in Japan

表紙絵 林 健造
「子どもの楽園」
扉カット 林 健造
「ぼく ふをみて ひけるんだよ 5歳」
扉題字 津守 眞
カット 斎藤明子
編集委員 吉岡晶子・伊集院理子

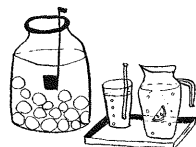
ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613 (営業)

次号予告

〈特集〉緑蔭図書紹介

村石昭三 皆川美恵子 横山洋子 篁倫子

・「子ども」と「おもちゃ」と「創造力」(2) 和久洋三



☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

おたより大募集

ご意見ご感想をお寄せ下さい。今月号の中で、特によかったもの、取りあげて
ほしい内容などもお知らせください。本誌へのご投稿もお待ちしております。

はがき：〒113-8611 東京都文京区本駒込6-14-9 (株) フレーベル館

「幼児の教育」編集部

Fax : 03-5395-6622 E-mail : youjimap@yaho.co.jp

行事別保育のアイデアシリーズ

日々の保育にうるおいと心地よい緊張感を与えてくれる「園行事」のアイデアを豊富に紹介する実技シリーズ

行事別保育のアイデアシリーズ 8

ふれあいいっぱい 誕生日会

阿部 恵 編著

誕生日会成功のポイント、司会のポイント、誕生日カード・誕生日表のアイデア、誕生日会アイデア&演出のポイントなど、誕生日会を楽しむための資料満載です。作り方と型紙付きなので、すぐに役に立つおすすめの本1冊です。



378-08

もくじ

はじめに
ふれあいいっぱい誕生日会成功のポイント10

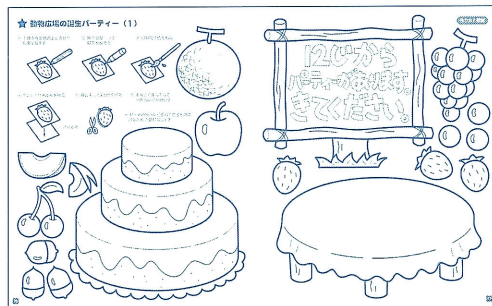
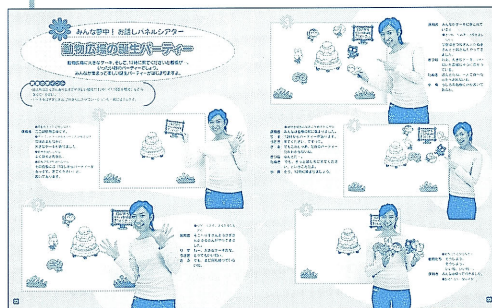
Part 1

みんな夢中! ふれあいいっぱい誕生日会のアイデア
みんなでみんなでハッピーバースデー/1びきの野ねずみが/たったかたったかおめでとう/たんじょうかいのマーチ/たべたいジャンケン/動物広場の誕生日パーティー/ここに誕生日カード・誕生日表/わくわく誕生日カード・誕生日表/うれしいな! かんむりとレイほか

Part 2

知ってよかった! 誕生日会進行アイデア
ふれあいいっぱい 楽しい司会をするためのポイント6/拍手がいっぱい! 誕生日児の入場アイデア/進行をスムーズに! ちょっとのつながり遊び/ふれあいいっぱい! お祝いのアイデア/よりよい誕生日会にするための資料

楽譜/作り方と型紙



▲作り方と型紙

26×21cm/96頁
定価2,310円(税込)

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

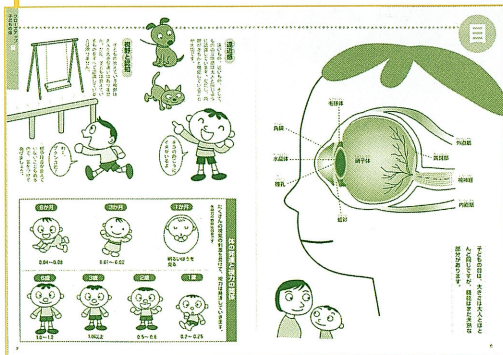
すぐわかる! 子どもの体のしくみ・
注意したい子どもの事故・子どもの病気と健康

保存版 子どものための安心Book

子どもの 体 安全 健康

山田 真・山中龍宏・池亀卯女 監修

子どもの体の不思議、
事故の予防、病気と健康のことなど、オール
図解でわかりやすく解説。保育現場や家庭で
役立つ、「安心子育て」のマニュアルです。



101-30

26×19cm 162頁
定価1,995円(税込)

- CONTENTS PART1 クローズアップ 子どもの体**
目／鼻／歯／耳／皮膚／爪／毛髪／手・足・筋肉／骨・関節／脳／おなか
アレルギー／心
- PART2 子どもの事故予防 安心ノート**
登園・園バスの事故／遊び・園庭・遊具／おでかけ・散歩での事故／熱中症・
落雷／日焼け／水の事故／虫刺され／誤飲／のど・耳・鼻・目に異物／動物
にかまれた・ひっかかれた・つかれた／やけど・感電／指をはさんだ・
打った／転倒・転落／切り傷／すり傷・刺し傷／脱臼／ねんざ
- PART3 子どもの病気 早わかりケアファイル**
花粉症／虫歯／食中毒／夏のうつる病気／皮膚のトラブル／くせと心の
トラブル／風邪／インフルエンザ／冬の事故・トラブル／耳・鼻のトラブル
ペットからうつる病気&寄生虫病

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。